



人類を揺るがした天文現象【1】

卑弥呼の日食

—西暦247年、恐怖の皆既日食が邪馬台国を襲った。そして卑弥呼は死んだ。—

横尾武夫（大阪教育大学）

1. 皆既日食の情景

地球上の我々から見て太陽が月に隠される現象を日食といい、年におよそ2回、地球上のどこからか見られる。特に、太陽が月に完全に隠される現象を皆既日食といい、こちらは数年に一度の割合で起こる。皆既日食は太陽の外層大気やコロナを、特別な装置なしに直接観測することができる唯一のチャンスだ。そのため、学術研究を目的とした観測がなされるだけでなく、その機会に居合わせた人々も、皆既日食のめずらしい自然現象を楽しむことができる。

皆既食の様子は、とても美しく印象深い。食が始まると、真っ黒い月が太陽の中心に向かって真っ直ぐに突き進んでいく。太陽が糸のように細い弧になると、地上の風景は夕暮れのように薄暗くなる。太陽がついに見えなくなる寸前に、一点から光りがもれる姿をダイヤモンドリングという。

太陽が完全に隠されると、太陽の数倍の広

がりをもつ真珠色の光が現れ、その中心にある真黒の月を際立たせている。その光は太陽から伸びる細い条線を束ねたような繊細な構造を持っている。月の縁のあたりを注意深く見ると、太陽の縁から突出した雲状のピンクの光がかいま見られる。

頭上の空は夜のように暗く、昼間のはずなのに星が見え、地上の風景は日ごろ見慣れたものとは違った暗い別世界となる。しかし、この美しい光景は数分間しか続かない。月の縁にピンク色の光が現れた次の瞬間、2度目のダイヤモンドリングが見られ、皆既日食は終わる。

日食は私達にとって特記すべき自然現象であるが、地震や台風のような災害ではない。継続時間は約2時間で、皆既日食は数分間で終わり、全く痕跡は残さない。しかし、皆既日食を自分の眼で見た人は「大宇宙の中に自分は生を受けたのだ」という実感と感動を持つに違いない。それが現代人にとっての日食である。

2. アマテラスの岩戸隠れ

日食といえば、日本人の多くは、日本神話のハイライトである「アマテラスの岩戸隠れ」の物語を連想するだろう。それは、古事記と日本書紀に次のように記されている。

「スサノオはアマテラスとの戦いに勝ったとして驕りすぎ、高天原で次から次ぎへと乱行におよんだ。田畑を荒らす。神聖な御殿に汚いものをまき散らす。大変なさわぎとなった。アマテラスは自分の弟のことなので、初めは大目にみていた。しかし、スサノ

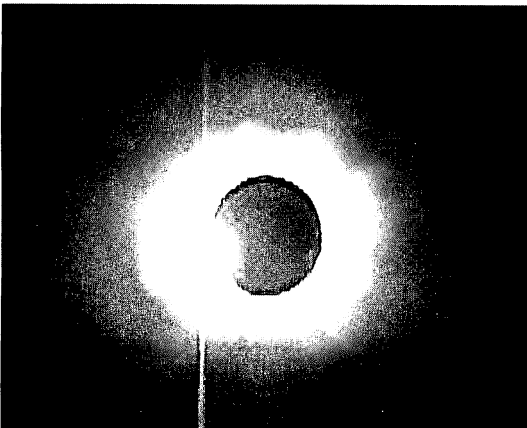


図1 皆既食 1999年 トルコにて



図2 天の岩戸 坂元誠 絵

オが神聖な機織りの館に、生剥ぎにした馬皮を放り込み、驚いた一人の織り姫が怪我をして死んでしまった。ここに及んでアマテラスはついに怒り、天の岩戸（あまのいわと）に隠れてしまった。

太陽の神が隠れたものだから、世の中が真っ暗になり、悪いことが次から次ぎへと起こった。高天原の神々は困り果て、アマテラスが天の岩戸から出てくるように、盛大な祭祀（さいし）を執り行うことにした。

神々は手分けをして、祭りのための鏡、玉、御幣などを新しく作った。八百万（やおろず）の神が天の岩戸の前に集まって祈りが始まった。アマノコヤネが祈詞を読み上げた。アマノウズメはひかげかずらをたすきにかけ、つるまきを髪かざりにし笹を手にもって、桶を逆さにしたその上で踊った。桶を踏み轟かせ、胸乳をあらわにして踊り狂った。踊りが最高潮に達したところで、裳裾の紐を押し下げて陰部があらわになったので、神々がどっ

と笑った。

アマテラスは外で何がおこったのかと、岩戸をそっと開いた。岩戸から一筋の光が洩れた。フトダダマがすかさずそれに鏡を向けた。アマテラスは自分の光のまぶしさに、ますますあやしく思い、岩戸から一步踏み出した。そこを岩陰に隠れていたタジカラオがその手をもって引き出し、アマノコヤネがすばやく注連縄（しめなわ）をはって天の岩戸を塞いだ。

天地に再び光りがよみがえった。]

古事記は万葉仮名まじりの漢文で書かれているが、現代の私たちでもそれほど抵抗なく読み下すことができる。文の流れに生き生きとしたリズムがあり、文学作品というよりは、舞台芸術の台本のようなものである。

この物語は、古代の人々が日食という自然現象を驚天動地の大事件として受け止め、それが民族の心に深く刻み込まれ、神話となって後世に受け継がれてきたものであろう。

3. 卑弥呼の日食

齊藤国治氏（旧東京天文台教授）は、古い記録と、天文計算の結果を付き合わせて、古代にあったさまざまな伝承が、実際に起こった天文現象と深い関わりがあることを明らかにされてきた。その一連の研究の中で、AD3世紀、邪馬台国の卑弥呼の時代に、我が国で皆既日食があり、それが「アマテラスの岩戸隠れ」の伝承を生んだという示唆をされている。先ず、AD2世紀から3世紀にかけての卑弥呼の事績が記されている、中国の史書である三国志の魏志倭人伝を覗いてみよう。

「倭国は多数の小国からなり、戦乱が絶えなかった。そこで、人々は邪馬台国の卑弥呼を『倭国女王』として擁立し、やっとな倭国は一つの大国としての纏まりが出来、大陸の魏国との交流も幾度かなされるまでになった。

平和な時代が続くようにみえたが、隣国の狗奴国はそれに従わず、邪馬台国との間で諍

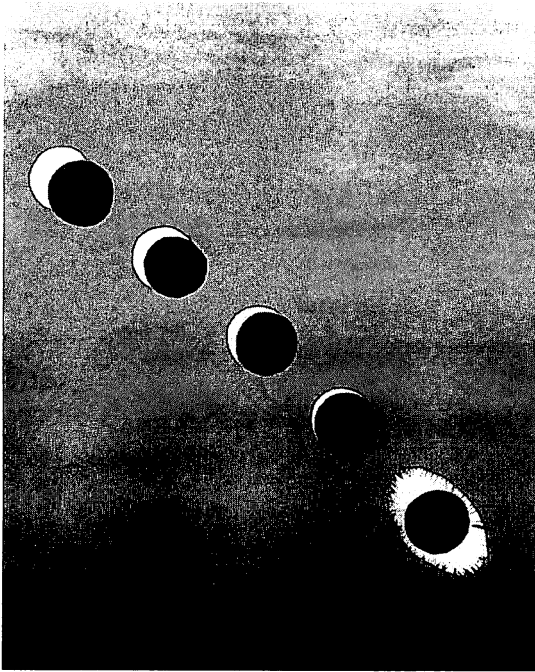


図3 卑弥呼の日食

いが続いていた。卑弥呼は魏国の権威を後ろ盾にして、事態を何とか納めようとした。卑弥呼の要請にしたがって魏国からの使者もやってきた。

しかし、突然に、卑弥呼に死が訪れた。巨大な墳墓が造られ、卑弥呼はそれに葬られた。

国土は再び戦乱に巻き込まれた。」

卑弥呼が死んだのはAD247年の事とされている。齊藤氏の天文計算によれば、丁度その年の3月24日に、我が国で皆既日食が見られたのである。

邪馬台国の位置については、昔から、畿内説と北九州説が大きな2つの説である。

まず、邪馬台国が北九州にあったとしてみよう。そうすると、そのときの皆既日食を北九州の地から見れば、愴絶としか言い様がない。太陽が西に傾いた午後5時頃から欠け始め、太陽が完全に月に隠されたまま、真西の地平線に沈んでいったはずなのだ。

これでは、人々は、もう夜が明けることは

永久にないのではないか、という底知れぬ恐怖に襲われたに違いない。

この日食を大和の地で見ればどうであろうか。齊藤氏の計算によれば、太陽は皆既ではなく、食分が0.63ぐらいで沈んだらしい。これでは邪馬台国の大和説には分が悪い。しかし、西に傾いた太陽は、減光のため肉眼ではっきりとその欠けた姿をみることはできるし、日没の瞬間は、皆既食とほとんど区別が付かない。いずれにしても、「愴絶」な光景であったことだろう。

小説家の井沢元彦氏はそれを受けて、「逆説の日本史」で話をさらに膨らませた。すなわち、卑弥呼は「日の巫女」であり、太陽の祀りを司る宗教的な国王であった。その中で突然の皆既日食の生起は、人々に、卑弥呼の霊力の衰えの徴に違いない、という思いをおこさせた。そして、卑弥呼は虐殺されてしまったというのである。

そして、次の朝、何事もなかったように東から朝日が現れて、卑弥呼の復活神話が生まれたのだろう。それが、高天原の最高神としての「アマテラス大御神」であったわけだ。

中国の歴史書にのみ記され、日本には記録がない邪馬台国が、列島の何処にあったかという謎は、古くから専門家からアマチュア研究者にいたるまで、かまびすしい議論が続いている。

卑弥呼の墓の有力候補として、大和の巻向に箸墓という美しい古墳がある。記紀の伝承によれば、その墓には、ヤマトトトビモモソヒメという奇妙で長い名の伝説的な女性が葬られているという。モモソヒメは崇神天皇の叔母であり、三輪山の神を祀る巫女であった。モモソヒメは、自らの手で凄惨な死をとげるのであるが、そのありさまは、アマテラスの機織りの館での織り姫の死とそっくり同じである。そして、日本書記にある別伝では、その織り姫はアマテラス自身であったとある。

邪馬台国・大和説が正しいとすると、おそらく、アマテラスとモモソヒメの伝承は共に卑弥呼につながることになるだろう。そして、卑弥呼は247年3月24日の日食の夕べに自殺した、という第三の説がなりたつのであるが、どうだろうか？

4. 古記録の中の日食

我が国だけではなく、世界各地の神話に、日食が題材となった物語が多く残されている。また、歴史書にも日食の記録が記されていることが多い。このような場合、現代の天文計算との比較から、日食の記事が編年のための重要な鍵となる。それだけでなく、記録のあり方そのものから、古代の人々の宇宙観がどのようなものであったかを伺い知ることができる。ここでは、史書の中から、古くて有名な日食の記録を見てみよう。

一つは、「タレスの日食」と呼ばれるもので、BC5世紀のギリシャの歴史学者ヘロドトスの「歴史」という書に、BC7世紀の事として記されている。

「小アジアのリディア国と東方イラン高原のメディア国は、長い間、戦争状態にあった。ある年の、国境での合戦の最中に、明るい昼が突然に真っ暗な夜に変わってしまった。驚いた両国はただちに戦いを止め、和平の誓約をした。

これは、日食であり、ミレトスの哲学者タレスがイオニアの人々に予言をしていたものである」

日食が平和をもたらしたという、目出度い話である。ここでは、哲学の父タレスが日食予報を始めたことになっているが、彼独自の発明ではなく、バビロニアの天文学がギリシャに伝わったものとされている。

二つ目は「義和の日食」と呼ばれるものである。これは、中国の春秋時代に孔子が編纂したといわれる「書経」という史書に、次のように記されている。



図4 清代に描かれた義氏と和氏 ニーダム「中国の科学と文明」より

「夏の仲康皇帝の時代に、義氏と和氏という天文学者が暦を司っていた。しかし彼らは日ごろから酒ばかり飲んでいて、日食の予報という任務を怠った。或る日、突然に日食がおこり、国中が大騒ぎになった。そのため皇帝は、胤という高官に命じて二人を誅伐した」

怠け者には首筋の寒くなる話であるが、義和の日食は、そのまま信じればBC2000年頃に溯る話であり、現代の科学史では実話とは認められていない。書経の実物は残っておらず、この話が書かれている書は、後漢時代(AD2世紀頃)に成立した偽書であるという。

これらの話は、いずれも日食の予報について語られている。そのような技術が、歴史から見てもおぼろげな古代にすでにあったとい

う事実は、現代の我々には一つの驚きである。

我が国の最も古い記録としては、日本書紀に、推古朝36年(AD628年)に

「日、此を蝕するあり」

とある。女帝が病床にある時で、その9日後に帝は崩御された。

当時の我が国には正式の暦はまだなかったから、予報された出来事ではなく、多くの人々がそれを実際に見たのだろう。しかし、この日食が人々に動揺をもたらしたものであったかどうかは、何も書かれていない。

記録上では、我が国で初めて暦が施行されたのは、持統朝のAD690年のことで、中国の元嘉暦と儀鳳暦を移入したとある。中国と日本の古い暦はすべて太陰太陽暦であり、そこでは、太陽と月の動きを算出して朔日(月の始め)を決定した。それに加えて、日食の予報を暦に具えることが重要な任務であり、その伝統は後の暦法に引き継がれた。

当時の天文学で、日食の予報がどの程度の精度で可能であったのだろう。橋本万平氏の「計測の文化史」によれば、平安時代の宣明暦のもとでの50年間を調査すると、76回の日食の記事が残されているが、現代の天文計算によれば、平安京では16回しか実見できなかったはずだ、ということが分かっている。

当時の人々にとって日食は忌むべき不祥事であり、予報が出ると、その日は、宮廷は堅く閉ざされ、一切の政務を休止したそうだ。そして、僧侶達は日食が起こらないように祈祷を盛んに行った。もし実際に日食が起こらなければ、修法の効があったとして僧侶に褒賞が与えられ、予報が的中すれば、暦博士の力量が賞賛されるというもので、先の中国の伝説と比べると、真におおらかなものではあった。

参考文献

荻原浅男, 1973, 校注・訳「古事記」, 小学館

坂本太郎他, 校注「日本書紀」, 岩波書店
武光誠, 山岸良二編, 1999, 「邪馬台国を知る事典」, 東京堂出版

池田真澄, 1993, 「日本神話の星々」, 月刊宇宙, Vol.10, No.1, p.12

斉藤国治, 1995, 「宇宙からのメッセージー歴史の中の天文こぼれ話ー」, 雄山閣

井沢元彦, 1993, 「逆説の日本史 I」, 小学館
斉田博, 1975, 「おはなし天文学 第3巻」, 地人書館

ニーダム, J. 1991, 「中国の科学と文明 天文編」, 吉田忠他訳, 新思索社

橋本万平, 1982, 「計測の文化史」, 朝日選書

編集部より:

新しい世紀になったところで、この2000年間を振り返って、この2000年間に起こった人類史を揺るがすような天文学的大事件をピックアップして、天文現象と人類の深い係わり合いについて考えてみたい、というのが、この連載の主旨です。第一回は、発案者である横尾武夫会長に筆を取っていただきました。